プログラム

会長講演

愛知県糖尿病協会共催シンポジウム

交流集会

動画コンテスト

一般演題

ランチョンセミナー

チャリティー・コーナー

会長講演

小ホール１　10：00～10：30

座長：吉田　照美（岡崎市民病院　看護局）

「ここから始まる愛知 CDEL の未来　～スティグマを超えて～」

演者：第 1 回 愛知 CDEL 学術集会 会長　**戸崎　貴博**

愛知県糖尿病協会共催シンポジウム

小ホール１　13：10～14：20

「CDEL のこれから―多職種で広げる活動と地域連携」

座長：清野　祐介（藤田医科大学医学部　内分泌・代謝・糖尿病内科学）
　　上村　昂斉（藤田医科大学病院　看護部）

糖尿病療養支援では、患者の生活背景や価値観を理解し、多職種が連携して継続的に支援することが求められる。愛知県糖尿病療養指導士（CDEL）は、それぞれの専門性を生かし、医療機関や地域において活動している。一方、活動の充実と発展に向けては、施設や職種を越えて経験や課題を共有し、互いに学び合う機会が重要である。また、資格取得後の学びを実践につなげ、活動を継続するためには、相談できる仲間や施設内外の協力体制も欠かせない。

本シンポジウムでは、愛知県内の各施設における取り組みを共有し、CDEL の連携強化と実践の促進に向けた今後の展望を考える。はじめに、CDEL のこれまでの歩みと今後の展望を確認し、各施設の活動を紹介する。続いて、看護師、管理栄養士、歯科衛生士、薬剤師の 4 職種のシンポジストが、それぞれの立場から活動の実際や課題を語る。療養生活への支援、食生活への支援、口腔の健康管理、薬物療法への支援など、多職種の視点に触れることで、互いの役割への理解を深め、協働の可能性を探る。

討議では、CDEL の活躍の場、CDEL 同士の交流と絆、今後の育成、地域連携、将来の活動のあり方を取り上げる。日常業務の中で資格や専門性をどのように生かすか、活動上の困難にどのように対応するか、経験の浅い CDEL をどのように支えるかなど、実践に即した視点から意見を交わす。また、医療機関と地域のつながりを通して、患者の生活を継続的に支えるために必要な工夫を考える。会場の参加者とも経験や疑問を共有し、それぞれの施設や地域で取り入れられる活動のヒントを見いだしたい。

本シンポジウムが、参加者一人ひとりにとって自身の活動を見つめ直し、新たな一歩を踏み出す機会となることを期待する。職種や施設の垣根を越えたつながりを育み、愛知県における糖尿病療養支援のさらなる充実につなげたい。

シンポジスト：

佐藤　史織（医療法人 TDE 糖尿病・内分泌内科クリニック TOSAKI・管理栄養士）

服部　芳明（春日井市民病院薬剤科・薬剤師）

向井紗耶香（岡崎市民病院・歯科衛生士）

山田ゆきの（医療法人偕行会偕行会城西病院看護部・看護師）

交流集会

小ホール２　14：00～15：00

知る・感じる・つながる！多職種で育てるこれからの糖尿病療養支援

進行：土川　睦子（DM-NURSE-LAB）

糖尿病療養支援には、医師、看護師、管理栄養士、歯科衛生士など、さまざまな職種が関わっています。でも、「他の職種って、実際にはどんなことを大切にしているのだろう？」「連携したいけれど、どう声をかけたらいい？」と思うことはありませんか？この交流集会では、難しい講義を聞くだけではなく、話して、聴いて、ちょっと体験してみることを大切にします。

まずは「仕事自慢」からスタート。「実は、私たちの仕事ってこんなところが患者さんの役に立っている！」をお互いに紹介します。

続いて、糖尿病患者さんの事例をみんなで考えながら、「心配なところ」だけでなく、「この患者さんのここがすごい！」という強みやできていることにも目を向けてみます。

そして最後は、「明日から、ちょっとやってみよう！」を一つ決めます。「明日の外来で、患者さんに一つ“できていること”を伝えてみよう」「いつもより一言、他職種に相談してみよう」そんな小さな一歩を、“いつ・どこで・誰に・何をする？”まで具体的にして持ち帰ります。

ナッジ理論の考え方も取り入れながら、「分かった」で終わらず、「ちょっとやってみよう」と思える場を目指します。

学会参加が初めての方も大歓迎です。

職種の違いを越えて、「へぇ！」「それ知らなかった！」「それ、すごい！」を一緒に見つけてみませんか？

ファシリテーター：

石田　和恵（やまむら総合歯科 矯正歯科・歯科衛生士）

鳥海　聖子（やまむら総合歯科 矯正歯科 ・歯科衛生士）

鈴木　未宇（社会医療法人財団新和会八千代病院・管理栄養士）

山下　智古（DM-NURSE-LAB・管理栄養士）

田中　千寿（あおい薬局・薬剤師）

濱嶋千亜希（糖尿病・内分泌内科クリニックＴＯＳＡＫＩかりや・看護師）

動画コンテスト

小ホール２　10：30～13：50

糖尿病医療ショート動画コンテスト

～みんなの取り組みを、みんなの学びに～

担当：押村　憲昭（かすもり・おしむら歯科　烏森院）

糖尿病診療に関わる各医療機関では、日々さまざまな工夫や素晴らしい取り組みが行われています。しかし、その活動をほかの医療機関が知る機会は決して多くありません。
そこで今回、各クリニックの取り組みを写真やショート動画にまとめ、みんなで学び合う動画コンテストを企画しました。
糖尿病患者さんへの生活指導、医科歯科連携、栄養指導、運動療法、フットケア、地域での啓発活動など、テーマは糖尿病に関わることであれば何でも構いません。
動画だからこそ伝わる現場の雰囲気や工夫、スタッフの思いがあります。優れた作品には「ベストムービー賞」を授与し、参加者全員で学びを共有したいと思います。
一つのクリニックの当たり前が、ほかのクリニックにとって新しい発見になる。そんな楽しく学べるコンテストを目指しています。

一般演題

小ホール１　10：30～11：30　一般演題 1

座長：岡田　照代（Nurse Office OKADA）

①-1　外来における糖尿病療養支援に向けた取り組みと結果

総合病院南生協病院内科外来　加藤　朋果　他

①-2　自己管理困難な糖尿病患者に対する受診時「週 1 回製剤」通院投与モデルの構築と
薬剤師 CDE の役割

JA 愛知厚生連知多厚生病院薬剤部　髙松　真衣　他

①-3　糖尿病患者への歯科衛生士による寄り添い型支援
―人工関節手術を契機に生活行動が変容した一症例―

医療法人つむぐこじまデンタルクリニック　岩谷　和代

①-4　オーラルフレイル・サルコペニアリスクを有する歯周病患者への継続的支援
～セルフケア・栄養・運動を通じた行動変容の 1 症例～

あい歯科矯正歯科　市川　真美栄　他

①-5 当院における患者参加型糖尿病カンファレンスの取り組み　～理学療法士の目線から～

岡崎市民病院リハビリテーション室　堀　友貴子　他

①-6 大規模商業施設とコラボした糖尿病啓発活動　－世界糖尿病デーin 春日井を経験して－

春日井市民病院臨床検査技術室　林　まゆ　他

小ホール１　14：40～15：40　一般演題 2

座長：福元　聡史（トヨタ記念病院　栄養科）

②-1　55 項目食行動質問票を用いた BMI と食行動との関連

社会医療法人財団新和会八千代病院栄養課　鈴木　未宇　他

②-2　外来個人栄養指導件数増加に向けた取り組み

トヨタ記念病院栄養科　上原　由希子　他

②-3　医科勤務経験を有する管理栄養士による歯科医院スタッフ教育支援の実践

DM-NURSE-LAB　山下　智古　他

②-4　当院における糖尿病診療の質の向上を目的とした多職種連携と院内教育の取り組み

ふじしま内科　品川　友美　他

②-5　愛知県糖尿病薬物療法研究会の歩みと成果

一宮西病院薬剤科　齋藤　香英　他

②-6　岡崎市幸田町における医科歯科連携の歩みそして多職種連携への展開

岡崎歯科医師会　市川　博文　他

ランチョンセミナー

小ホール１　12：00～12：50

座長：成瀬　桂子（愛知学院大学歯学部内科学講座）

「高齢化社会のダイアベティスケア　～CDEL だからできること～」

演者：藤田医科大学医学部　内分泌・代謝・糖尿病内科学　**清野　祐介**

共催：住友ファーマ株式会社

チャリティー・コーナー

小ホール２　10：30～15：30

担当：伊藤　純子（イトウ内科クリニック）

糖尿病専門クリニックが作ったクッキーと糖尿病サポートカレンダー

静岡県沼津市のあそうクリニック・院長　麻生克己先生は患者さんの食べる楽しみと糖尿病治療を両立させようとクリニックの隣にカフェをオープンしました。
カフェでは、診察前後の患者さんが食事やお茶を楽しむことができます。
また、糖質を控えたお惣菜やお菓子も販売しています。
本学会ではカフェから焼き菓子を取り寄せ販売いたします。



焼き菓子　２００円～

「糖尿病サポートカレンダー」は、豊田市のイトウ内科クリニックが毎年作成している糖尿病の療養生活を応援するカレンダーです。季節に合わせた食生活の注意点や糖尿病合併症について学べる内容です。2027 年版を販売いたします。





１冊　８００円

現金での販売のみです。
予定数がなくなり次第、終了いたします。
売上金の一部を IDDM ネットワークに寄付いたします。

抄録

会長講演

愛知県糖尿病協会共催シンポジウム

会長講演

ここから始まる愛知 CDEL の未来　～スティグマを超えて～

糖尿病・内分泌内科クリニック TOSAKI
戸崎　貴博

「生命保険への加入が難しい」「自己管理ができない人間だ」――ダイアベティス（糖尿病）を持つ方々は、こうした言葉を家族や友人、あるいは社会から向けられることがあります。恥や不信用の烙印を意味する「スティグマ」は、当事者の自己効力感を低下させ、「病気のことを誰にも言いたくない」「自信がなくなった」という心理的苦痛をもたらします。

では、これらの反応は科学的に正しいのでしょうか。答えは明確に「否」です。

ダイアベティスの発症には遺伝的素因が深く関与しており、食事・運動に十分注意していても発症する方は数多くいらっしゃいます。「食べ過ぎ・運動不足が原因」という単純な決めつけは、病態の複雑さを無視した誤りです。医療従事者として、この誤解をダイアベティスを持つ人や地域社会に向けて積極的に訂正していくことが求められます。

「ダイアベティスを持つ人は寿命が短い」という言説も、現代においては再考が必要です。6,140 人を対象に 4.1 年間経過観察した研究では、40 歳からの平均余命はダイアベティスのある方とない方でほとんど差がないことが報告されています。さらに、虚血性心臓病および脳血管障害による死亡率は、日本人一般集団と比較しても低い水準にあります。

適切な医療支援と自己管理の継続によって、ダイアベティスを持つ方も充実した人生を歩むことができる――このエビデンスを、私たちは自信をもって伝えるべきです。

ダイアベティスを持つ方々は、将来の夢や希望に向かって人生を歩む権利を持っています。スティグマは、その歩みを不当に妨げるものです。医療従事者が正確な知識と温かい姿勢で寄り添うことが、スティグマを解消する最も力強いアプローチです。

愛知 CDEL では、来年度の世界ダイアベティスデーに向けて市民の皆さんが参加できるイベントを企画しています。ダイアベティスへの正しい理解を地域全体に広げ、スティグマのない社会を共につくるために、医療従事者の皆さんのお力添えをぜひお願いしたいと思います。ダイアベティスを持つ人に寄り添う私たちの姿勢こそが、地域を変える力になります。ともに歩んでいきましょう。

愛知県糖尿病協会共催シンポジウム

CDEL のこれから ―多職種で広げる活動と地域連携

CDEL がもたらす多職種連携と次世代育成

糖尿病・内分泌内科クリニック TOSAKI
佐藤史織・管理栄養士

糖尿病支援において、管理栄養士に求められるのは専門知識の向上だけではありません。他職種と深く交わり、地域における実践から学ぶことです。私自身、CDEL の取得を機に世界が大きく広がりました。

最大のメリットは、日々の多忙な業務から視野が広がり、地域で活動する他職種の知見に触れられることです。優れた取り組みを知ることは大きな刺激になりますが、同じ地域で活躍する医療者の姿は、より身近な目標として捉えやすいという利点があります。「自分の地域にもこんな実践をしている人がいる」「自分にも何かできるかもしれない」という気づきは、日々の臨床に対する尽きない原動力となります。また、こうした学びを通して得た資格や人とのつながりが評価され、現在では施設外での講演会など、活動の場を大きく外へと広げる貴重な機会にも恵まれています。

この学びと挑戦の連鎖を未来へ繋ぐことこそ私の使命です。糖尿病支援に関わるすべての人にとって、CDEL 取得は、専門性を高める確かな道標となります。経験者が学び続ける姿を示し、後輩たちの挑戦を力強く後押ししながら、共に成長し続けたいと考えています。

愛知 CDEL が単なる知識の修得の場にとどまらず、職種の垣根を越えたつながりが交差する拠点となり、次世代の育成と温かな地域連携の未来を切り拓く基盤となることを心から期待し、私自身も歩み続けます！

愛知県糖尿病協会共催シンポジウム
CDEL のこれから ―多職種で広げる活動と地域連携

糖尿病療養指導士における薬剤師の役割と今後の期待

春日井市民病院薬剤科
服部　芳明・薬剤師

私が糖尿病医療に携わるようになったきっかけは、平成 9 年に恩師である糖尿病専門医と出会ったことでした。当時はインスリンの使用方法さえ十分に理解していない薬剤師でしたが、恩師の指導のもと、多職種の仲間とともに平成 10 年に糖尿病教室を開始しました。それぞれの専門性を生かして互いに補い合いながら患者を支えることにやりがいを感じ、今日まで糖尿病医療に携わってきました。

平成 20 年には、春日井市薬剤師会の先生方と当院糖尿病センターとの患者情報の連携を目指し、糖尿病研修会を開催しました。しかし、翌年から開始した糖尿病療養指導に関する連携は、期待したようには進みませんでした。そこで、平成 24 年からは「地域連携糖尿病研修会」として多職種参加型の研修会を開催し、地域の医療関係者の知識向上と連携強化に努めてきました。

糖尿病は自覚症状に乏しく、治療薬には食前に服用するものもあるため、服薬アドヒアランスの維持が課題となる場合があります。薬剤の薬理作用を踏まえ、患者の生活状況に応じた服用タイミングの調整などを提案することも、薬剤師の専門性を生かせる役割の一つです。また、令和 3 年 9 月の厚生労働省通知では、糖尿病患者等への自己注射や自己血糖測定に関する実技指導が、タスク・シフト／シェアが可能な業務の具体例として示されています。薬剤師は、注射手技の確認に加え、インスリンボールの有無など注射部位の状態確認や、低血糖時の対応についても指導・支援に関与できます。それぞれの専門性を生かしてチームで患者を支えることは、患者の利益だけでなく、医療従事者自身の仕事のやりがいにもつながります。

本シンポジウムでは、これまでの経験を振り返りながら、地域における糖尿病医療連携と薬剤師の役割、そして患者を支えることを通じて得られる仕事の「やりがい」について、ディスカッションを深めたいと考えています。

愛知県糖尿病協会共催シンポジウム
CDEL のこれから ―多職種で広げる活動と地域連携

口腔からの支援を考える
～糖尿病医科歯科連携における歯科衛生士の役割～

岡崎市民病院
向井　紗耶香・歯科衛生士

令和 8 年の医科診療報酬改定において「歯科医療機関連携強化加算（60 点、年 1 回）」が新設されました。この改定では、医科から歯科への受診勧奨を促しており、近年における医科歯科連携の重要性の高まりを反映していると思われます。

今回、糖尿病患者さんに対する当院の歯科衛生士の活動を紹介させていただきます。糖尿病教育入院中の患者さんは、糖尿病教室の参加、歯科口腔外科の受診をします。糖尿病教室では歯周病と糖尿病の関係、歯周病について、歯みがきの方法等を説明します。歯科口腔外科の受診では、歯科医師の診察後、歯科衛生士による歯周病の検査、口腔清掃方法の説明等、患者さんの口腔内に適した対応を個別に行います。その中でも特に、歯科の定期受診の勧奨を重要視しています。当院では当科の特性状、地域の歯科医院に歯周病の継続管理を依頼しています。そのため、歯科口腔外科を受診時に患者さんの了承を得た上で、内分泌・糖尿病内科の医師が、かかりつけ歯科医院宛に糖尿病の現状も含めた紹介状を作製し、歯科と医科との情報共有を図っています。

また数年前より、当院の糖尿病・内分泌内科、糖尿病看護特定認定看護師を中心に岡崎市における糖尿病医科歯科連携を推進しています。岡崎歯科医師会、岡崎市医師会、岡崎市歯科衛生士会の協力の下、総合病院、かかりつけ医、かかりつけ歯科医が連携をとり、患者さんを包括的に支援できる仕組みの構築に邁進しております。その中で歯科衛生士は受診された患者さんの生活背景、思いを考慮し、継続した「歯周病の治療・予防」と「糖尿病の治療」の双方を支援できるよう働きかけています。この糖尿病医科歯科連携は発展途中ではありますが、歯科衛生士として、口腔を全身の中の一部として捉える視点を持ち、口腔から支援をする専門職として糖尿病医科歯科連携の発展に向け、携わっていきたいと思います。

愛知県糖尿病協会共催シンポジウム
CDEL のこれから ―多職種で広げる活動と地域連携

糖尿病治療支援をつなぐ CDEL の役割
～当院における継続支援と地域連携を通して～

医療法人偕行会　偕行会城西病院　看護部
山田　ゆきの・看護師

糖尿病治療支援においては、患者が住み慣れた地域でその人らしい生活を維持しながら、治療を継続できるよう支援することが重要である。そのためには、医療機関内での支援に加え、患者に関わる多職種や地域の支援者との連携が欠かせない。愛知県糖尿病療養指導士（CDEL）は、患者の治療と生活を支えるとともに、医療と地域をつなぐ役割も担っている。

当院では、糖尿病カードシステムを活用し、患者の理解度や治療上の課題に応じた継続的な治療支援を実践している。また、医師、看護師、管理栄養士、理学療法士などの多職種が連携し、患者一人ひとりの生活背景や価値観を共有しながら、個別性を重視した支援に取り組んでいる。

特に、高齢者糖尿病では、認知機能や身体機能の低下に加え、独居や老々介護などに伴う生活上の課題により、従来の治療や自己管理の継続が困難となる場合もある。そのため、訪問看護師やケアマネジャー、介護施設職員などの地域の支援者と情報を共有し、患者の生活環境や自己管理能力を踏まえた支援方法をともに検討している。こうした連携を通じて、医療機関での支援を地域へとつなぎ、多職種で患者の治療と生活を支えることを大切にしている。

さらに、糖尿病教室など地域住民を対象とした啓発活動を通じて、糖尿病の発症予防や重症化予防に関する情報発信にも取り組んでいる。正しい知識の普及や健診の重要性を伝えることで、地域住民が自身の健康に関心を持つきっかけづくりを目指している。

このように、CDEL には患者一人ひとりへの継続的な治療支援に加え、多職種や地域の支援者と連携し、患者の治療と暮らしを支える役割がある。本シンポジウムでは、当院における実践を紹介し、地域における CDEL の役割と、多職種が協働して患者の治療と生活を支えることの重要性について共有したい。

抄録

一般演題

①-1 外来における糖尿病療養支援に向けた取り組みと結果

[1]総合病院　南生協病院内科外来
加藤　朋果[1]、山田さおり[1]

【目的】
糖尿病療養支援は、患者が日常生活の中で自己管理が行えるよう継続して支援することが重要である。しかし当院の内科外来では、診療補助業務が優先され、継続的な糖尿病療養支援ができておらず、2024 年度、継続支援を実施した患者は5名にとどまっていた。さらに、スタッフが療養支援に必要な知識を学ぶ環境も整っておらず、スタッフ全員が療養支援に自信を持てていなかった。そこで、継続的な療養支援を提供できる外来を目指し、スタッフ教育と療養支援体制の整備に取り組んだため、結果を報告する。
【方法】
「糖尿病看護」をテーマとした学習会で継続支援の必要性を共有し、病態や合併症などに関するミニ学習会を毎月実施した。支援場所の確保と療養支援担当者を1日1名配置し、診察前に療養支援を行い、その内容を多職種で共有した。さらに糖尿病看護認定看護師と愛知県糖尿病療養指導士が相談役となり、療養支援担当者を日常的にサポートした。取り組み後、内科外来スタッフ7名全員を対象に、知識や自信の変化についてアンケートを行った。
【結果】
療養支援体制の整備後は、継続支援を実施した患者は 50 名と増加した。スタッフのアンケートでは、71.4%が知識の増加を実感し、85.7%が療養支援を実施してよかったことがあると回答した。自信がついたと回答したものは 42.9%であった。自由記述では、患者の行動変容や血糖データの改善、患者と向き合う時間の確保などが挙げられた。
【結論】
スタッフ教育と療養支援体制の整備により、継続的な療養支援を提供できる外来体制が構築された。また、スタッフの知識が向上し、支援を通じた肯定的な経験の積み重ねが自信につながった。今後も教育・相談・実践後の振り返りを継続し、スタッフの自信と支援能力の向上とともに、療養支援の質や臨床指標への効果を評価していく。

①-2 自己管理困難な糖尿病患者に対する受診時「週1 回製剤」通院投与モデルの構築と薬剤師 CDE の役割

[1]JA 愛知厚生連　知多厚生病院　薬剤部
[2]JA 愛知厚生連　知多厚生病院　内科
高松　真衣[1]、原田　紘嘉[1]、奥平　雅美[1]、永田　治[1]、丹村　敏則[2]

【目的】当院は、認知機能低下、薬物療法の自己管理が困難な高齢・単身患者が多く、通院時の「週 1 回製剤 院内投与モデル」を構築し、薬剤師介入によるアドヒアランス・血糖管理の改善と臨床的意義を経験した 3 症例を報告する。
【症例報告および薬剤師の介入内容】以下、臨床背景を①、薬剤師の役割・行為を②、経過を③と表記。
症例 1：服薬不遵守と食生活の乱れにより DKA で 4 回入院歴あり。尿ケトン体陽性が持続。②教育入院時にインスリンイコデク及びチルゼパチドの受診時投与を立案・指導を実施。退院後も外来受診時に手技・体調フォローを継続。③食事療法未徹底のため HbA1c は高値（11.2%→半年後 10.6%→1 年後 10.8%）で推移するが、確実な投与により尿ケトン体は陰性化し、DKA 再発予防ができた。症例 2：①全盲かつ独居のため薬剤管理が難しく血糖コントロール悪化（HbA1c 13.1%）し、教育入院を実施。②退院後はヘルパーの買い物手配枠に合わせた週 1 回の受診時のデュラグルチド投与を提案。視覚障害に対応した服薬支援を実施。③HbA1c は半年後 7.2%→1 年後 8.3%と改善・維持。症例 3①認知傾向があり内服自己中断を繰り返し（HbA1c 14.6%）、SU 薬服用中であり低血糖を懸念。②自己注射不可と判断し、デュラグルチドへ変更を提案。低血糖予防およびポリファーマシー改善を目的に SU 薬の中止を提案し承認。③HbA1c は半年後 7.8%→1 年後 10.1%へと改善。低血糖防止とポリファーマシー削減を達成。
【考察】患者の生活背景・身体機能に応じた計画構築、処方提案、服薬モニタリングという多角的な評価と介入を実施し、定期的通院スタイルを構築したことで、医療スタッフが定期的に患者と接触する機会が創出され、孤立しがちな患者の変化や異変にいち早く気づく地域の見守りセーフティネットとしての役割を果たすことができたと考えられる。
【結語】自己管理困難な糖尿病患者に対する「週 1 回製剤通院投与モデル」は、薬剤師業務が中核的役割を果たすことが示唆された。

①-3 糖尿病患者への歯科衛生士による寄り添い型支援
—人工関節手術を契機に生活行動が変容した一症例—

医療法人つむぐ　こじまデンタルクリニック
歯科衛生士　岩谷　和代

【目的】
糖尿病患者に対し、生活背景や受け入れ状況を踏まえた歯科衛生士による継続的な口腔管理支援を行い、生活行動、口腔内状態および血糖コントロールの変化を検討した。
【方法】
対象は 50 歳代男性。糖尿病（HbA1c 8.2～9.5%で推移、インスリン療法中）、高血圧、緑内障の既往があり、喫煙 1 日 30 本、飲酒習慣を認めた。口腔内は重度歯周病、多数の齲蝕、プラークコントロール不良であった。内科・歯科とも定期受診の習慣がなく、歯科には疼痛時のみ来院していた。生活背景と検査値の関連を捉え、患者の性格や受け入れ状況に応じ、口腔ケア用品とセルフケア方法を提案した。患者の意思を否定せず肯定的に受け止め、定期来院を促すとともに、薬剤情報の確認など全身状態の把握に努めた。口腔ケア・歯科治療と糖尿病との関連を説明し、無理なく継続できるセルフケアと専門的口腔ケアを併用した。
【結果】
人工関節手術を希望通りに受けられなかった経験を転機に、患者は禁煙・禁酒を決意し、治療への協力度が向上した。詳細な歯周組織検査は同意が得られず実施できなかったが、歯肉腫脹とスケーリング時の出血は減少した。HbA1c などの検査値を自ら話すようになり、全身状態への関心も高まった。HbA1c は初診時 9.0%から、2026 年 5 月の人工関節手術前には 7.6%まで改善した。
【結論】
本症例では、人工関節手術を契機に生活行動が変容し、その過程で歯科衛生士が生活背景と受け入れ状況を踏まえて継続的に支援した。実行可能な方法をともに考える個別的な支援は、信頼関係の構築と口腔管理への意識向上を促し、主体的な健康行動の継続を支える一助となる可能性が示唆された。

①-4 オーラルフレイル・サルコペニアリスクを有する歯周病患者への継続的支援 ～セルフケア・栄養・運動を通じた行動変容の 1 症例～

[1]あい歯科矯正歯科　市川真美栄[1]（歯科衛生士・管理栄養士・健康運動指導士）、近田美咲[1]（管理栄養士）、伊藤明里[1]、市川博文[1]（歯科医師）

【目的】
歯周基本治療およびセルフケア支援を基盤として、口腔機能、栄養、身体機能にも着目し、オーラルフレイル・サルコペニアリスクを有する患者への継続的支援を行った。本症例を通して、歯科から全身状態の変化に気づき、患者主体の行動変容を支援する意義を検討する。

【方法】
対象は 65 歳男性。歯周基本治療とセルフケア指導を行い、歯間ブラシを提案し実践状況を確認した。治療経過中、HbA1c は 7.4%から 6.9%へ低下した一方、体重が約 10kg 減少し、「体力が落ちて疲れやすい」との訴えがあった。栄養指導を受けていないことも分かり、食事・運動・口腔機能を含めた生活背景を確認し、提案した。朝食がパンとコーヒーのみであったため、牛乳・ヨーグルト・卵などを「プラス 1 品」として提案した。運動は座位でできる「もも上げ」を、口腔機能では「ガラガラうがい」を提案した。複数の課題を一度に求めず、患者自身が取り組む目標を選択し、メンテナンス時に日常生活の状況を聞き取り、次にできる内容を一緒に検討し、継続的に支援した。

【結果】
BOP は 26.1%から 2.9%へ、4～6mm の歯周ポケットは 8.0%から 4.3%へ減少し、3mm 以下の歯周ポケットは 92.0%から 95.7%へ改善した。セルフケアでは、歯間ブラシの使用開始後、「歯磨きをやっているけど、ちゃんと磨けているかな？」との発言があり、口腔清掃への関心の高まりがみられた。また、体重減少と疲労感を契機に、栄養・運動・口腔機能への支援を継続している。

【結語】
歯周病患者のメンテナンスでは、口腔内所見だけでなく、体重、食事、疲労感、身体機能などの変化にも目を向けることが重要である。本症例では、患者の訴えを契機に支援を全身へ広げ、「小さな目標を一つ選び、次回来院時に振り返る」ことを継続した。患者主体の取り組みを支援することは、セルフケアへの関心や行動変容に繋がり、オーラルフレイル・サルコペニアリスクへの早期対応の一助となる可能性が示唆された。

①-5 当院における患者参加型糖尿病カンファレンスの取り組み　～理学療法士の目線から～

岡崎市民病院
[1] リハビリテーション室、[2] 内分泌・糖尿病内科、[3] 看護局、[4]臨床検査室、[5]栄養サポート室、[6]薬局、[7]診療技術室
堀　友貴子[1]、滝　　啓吾[2]、星田百合香[3]、後藤　優依[4]、福田　圭花[5]、大村　真穂[6]、向井紗耶香[7]、三浦　恵子[3]、吉田　照美[3]、渡邉　峰守[2]

【背景】
患者参加型医療とは患者と医療者が協同で医療の質と安全を向上させる医療である。慢性疾患である糖尿病において、患者のセルフケアが治療に重要であることから、患者参加型医療による効果が大きい可能性がある。
【目的】
当院では 2025 年 3 月より、内分泌・糖尿病内科に入院した糖尿病教育患者に対して、医療者に加えて患者を含めた患者参加型糖尿病カンファレンス(参加型カンファ)を開始したので、実際の症例を含めて取り組みを報告する。
【参加型カンファ】
参加型カンファ実施前に、患者の「糖尿病に対する思い、退院後の目標」についてアンケートを実施。参加型カンファでは医師からの治療経過等の説明ののち、アンケートの回答を患者と糖尿病チームで共有し、多職種から退院後の生活についてメッセージを伝える。患者の疑問点や思いを確認しながら、患者と糖尿病チームで退院後の治療方針について検討している。
理学療法士としては「患者の思い、目標」を共有し、患者とともに退院後の運動療法の方針を決定する。また糖尿病チームに所属する多職種と協同して、患者とともに適切な運動内容や運動時の栄養摂取などについても検討している。
【症例】
50 歳代後半、男性、2 型糖尿病、入院時 GA25.4%。患者は将来ゴルフのシニアツアーに参加することを目標とした。参加型カンファにおいて、ゴルフができる身体機能を維持するために退院後も歩行運動やレジスタンス運動を継続することを提案した。また医師や管理栄養士とともに、筋肉量維持のためのタンパク質摂取についても提案した。退院半年後、GA は 18.6%、1 万歩の歩行と腹筋等のレジスタンス運動を継続しており、昼食時にサラダチキンを追加するなどの行動変容がみられた。
【結語】
参加型カンファにより患者が主体的に治療に参加するとともに治療方針決定にも参加することで、治療効果や治療満足度の向上につながる可能性がある。

①-6 大規模商業施設とコラボした糖尿病啓発活動 －世界糖尿病デーin 春日井を経験して－

春日井市民病院臨床検査技術室 [1]、春日井市民病院糖尿病内分泌内科 [2]、田島クリニック [3]
林 まゆ[1]、後藤 慎一[1]、岡田 由紀子[2]、田島 義孝[3]、小川 るるな[2]、富貴原 紗侑里[2]、渡邊 梨紗子[2]、松田 淳一[2]

【背景】
糖尿病人口は年々増加しており予備軍を含めると 2000 万人を超え、日本人の 5 人～6 人に 1 人が糖尿病であると報告された。そのため、より多くの方に対する糖尿病の予防や早期発見、受診継続の重要性の啓発活動が必要である。当市における糖尿病啓発活動は 2014 年から始まり、地域住民に向けて 11 月 14 日の世界糖尿病デーに合わせて、「世界糖尿病デーin 春日井」として 13 年継続してきた。第 1 回～第 9 回までは糖尿病患者向けに二次予防、三次予防の啓発活動として自施設で開催した。コロナ禍においても継続して活動を続け、その活動内容は 2023 年の糖尿病学術集会で報告した。第 10 回目からは新たなステージとして大規模商業施設で地域住民へ向けた一次予防の啓発活動を開始した。
【目的】
地域の医療関連団体・多職種が関わり地域住民へ糖尿病の啓発を継続的に行うこと。
【内容と結果】
今年度の開催は11月3日を予定している。4月から毎月1回、協力団体と対面で企画会議を行い、各団体から持ち込まれた企画案を検討し、地域住民から喜ばれる企画を決定した。参加職種は医師、歯科医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師、理学療法士、管理栄養士、保健師、事務職、健康運動指導士の10職種である。当市の大規模商業施設にて、糖尿病をテーマにしたトークショー、運動や食にまつわる体験コーナー、市内の緑道をウォーキングするイベントを行う予定である。イベント内容やアンケート調査結果を報告したい。
【結語】
2014 年から始まった地域の医療関連団体・多職種で行う糖尿病啓発活動は 2026 年で 13 年目を迎えた。地域の医療関連団体・多職種で取り組む「世界糖尿病デーin 春日井」の活動は、地域住民への糖尿病啓発活動に貢献できた。

②-1 55項目食行動質問票を用いたBMIと食行動との関連

社会医療法人 財団新和会　八千代病院　栄養課
鈴木未宇、加藤るみ子

【目的】
肥満者への栄養相談では、食事内容だけでなく、食べ方や食べる場面など、普段の食行動を把握することが重要である。そこで、55 項目食行動質問票を用いて BMI と関連する具体的な食行動を明らかにし、栄養相談での着目点を検討した。
【方法】
対象者は当院で食行動質問票を実施した 19 例。55 項目の質問に対する回答結果と BMI についてスピアマンの順位相関行列を用いて検討した。BMI との相関が比較的強かった項目について、設問内容から栄養相談への活用について検討した。
【結果】
BMI との間に有意な正の相関を認めたのは、問 29「食事のメニューは和食よりも洋食が多い」（r=0.505、p=0.027）、問 10「風邪をひいてもよく食べる」（r=0.499、p=0.030）、問 30「ハンバーガーなどのファーストフードをよく利用する」（r=0.459、p=0.048）であった。また、問 41「口いっぱい詰め込むように食べる」（r=0.401）、問 42「他人よりも太りやすい体質だと思う」（r=0.363）、問 34「果物やお菓子が目の前にあるとつい手が出てしまう」（r=0.362）でも正の相関を認めた。
【結論】
BMI と関連する項目には、洋食やファストフードなどの食事内容だけでなく、「体調が悪くても食べる」「目の前にあると食べる」といった食べる場面や、「一口詰め込むように食べる」といった食べ方に関する項目もみられた。肥満者への栄養相談では、「何を食べていますか」だけでなく、「どんな時に食べますか」「どのように食べていますか」まで聞くことで、改善につながる食行動を具体的に捉えられる可能性がある。

②-2 外来個人栄養指導件数増加に向けた取り組み

[1]トヨタ記念病院　栄養科、[2]内分泌・糖尿病内科
上原由希子[1]、福元聡史[1]、丘山智子[1]、保古則子[1]、矢須田侑兵[1]、小田侑希[1]、近藤理帆[1]、是松佑佳[1]、松本美那[1]、大川哲司[2]、篠田純治[2]

【目的】
当院では限られた人員体制の中で、外来個人栄養指導（栄養指導）および糖尿病透析予防指導（透析予防指導）の件数増加と質の向上に取り組んできた。今回は 2023 年度以降の取り組みと成果について報告する。
【方法】
2023 年度と 2026 年度（4～7 月実績）の栄養指導および透析予防件数を後方視的に比較した。件数増加に向けた主な取り組みとして、①糖尿病体験入院後の外来継続フォロー、②透析予防指導における運用改善（看護師との協働指導）、③記録テンプレートの見直し（記録方法の統一、検査値の自動入力）、④当日予約に向けた準備対応（外来スタッフと連携し、当日予約の事前予測）と予約枠の拡充（15 枠→20 枠）、⑤がん化学療法（化学療法室への時間帯常駐）および循環器疾患患者入院後の外来継続フォローを実施した。
【結果】
栄養指導件数は、2023 年度の月平均 174 件から、2026 年度は 298 件へと 1.7 倍に増加した。このうち糖尿病患者への指導件数は 88 件から 120 件へと 1.4 倍に増加した。透析予防指導件数は、月平均 6 件から 27 件へと 4.5 倍に増加した。一方、管理栄養士数は2023年度8名（育休1名）から 2026 年度 9 名（時短勤務等 2 名）であり、大幅な増員や残業時間の増加は認められなかった。
【考察】
限られた人員体制においても業務改善を継続し、多疾患に対応できる体制整備を進めたことにより、栄養指導件数は増加した。糖尿病患者指導においては、記録テンプレートの見直しにより記録業務が効率化され、患者対応に充てられる時間が増加した。当日予約を見越した業務調整や科内での応受援体制を構築したことで、増員することなく、事前予約がない患者にも柔軟に対応できる体制が整備された。透析予防指導では、看護師と協働して指導を行うことで、患者への重複した聴取を省略できるとともに、その場で情報共有や記録の分担、今後の指導方針の検討が可能となった。以上の取り組みにより、栄養指導件数の増加を達成することができた。

②-3 医科勤務経験を有する管理栄養士による歯科医院スタッフ教育支援の実践

DM-NURSE-LAB
山下 智古、土川　睦子、岡田　照代

【目的】
近年、糖尿病など生活習慣病と密接に関連する歯周病対策において、口腔と栄養の相互作用を踏まえた支援は不可欠である。しかし、歯科診療現場においては、栄養の観点を取り入れた歯科診療や管理栄養士との適切な連携体制に課題を抱えている施設も少なくない。そこで、歯科スタッフが全身疾患を理解し、栄養面を含めた支援を実践できる人材育成を目的として、歯科医院への栄養サポート介入の実践を報告する。
【方法】
A 県 B 歯科医院を対象として、事前ヒアリングに基づき管理栄養士の役割、主要疾患、ライフステージ別の栄養支援に関する講義を月 1 回実施した。年間プログラム終了後、歯科医師、歯科衛生士、歯科助手、管理栄養士、保育士、医療事務の同意者にアンケート調査を行い、介入の理解度・満足度・今後の課題を評価した。
【結果】
実務経験年数が1～3年のスタッフが最多で、満足度は88%が「非常に満足」、理解度も 88%が「よくわかった」と回答した。満足度の高いテーマは「高齢者」が最多で、「妊産婦」「糖尿病」「高血圧」が続いた。自由記述では、「栄養の基礎をわかりやすく学べた」「実践に即した内容と具体例が役に立った」「経験に基づく説明でいつも勉強になった」「さらに深く学びたい」など、職種を問わず前向きな意見が多く、栄養視点の重要性を実感する声が多数みられた。
【結論】
栄養サポート介入により、口腔機能と栄養状態が全身疾患の予防・管理に直結することを多職種で再確認できた。全身疾患の理解が深まることで、歯科での生活習慣病の兆候や栄養不良の早期発見にもつながり、患者支援の質向上に寄与すると考えられた。歯科領域に栄養の視点を早期から取り入れることは、医科歯科連携の推進にも有効である。現在は、糖尿病看護認定看護師と連携し、より深い全身疾患の知見共有と実臨床への応用を進めており、歯科を起点とした多職種連携の発展が期待される。

②-4 当院における糖尿病診療の質の向上を目的とした多職種連携と院内教育の取り組み

ふじしま内科
品川　友美、山下祐理子、行弘　晴香、中山　里奈、佐藤　愛梨、原　久美子、藤島圭一郎

【目的】
当院では多職種が糖尿病診療に携わっているが、職種間の情報共有は十分でなく、診療方針や支援方針への認識のずれも課題であった。そこで、知識向上・情報共有、多職種連携の強化に加え、クリニックの方針や認識をすり合わせ、組織として同じ方向を向くこと、患者の糖尿病への関心・理解向上を目的に、院内勉強会・症例検討会・院内イベント等の取り組みを行ったので報告する。
【方法】
・院内勉強会：月 1 回、医師を中心とした勉強会を行い、知識の向上・統一とともに、診療方針や支援に対する認識をスタッフ間ですり合わせ、組織として同じ方向を向くための時間とした。
・症例検討及び一口メモの作成：スタッフが担当する症例検討会を実施するとともに、学習内容を補完する「一口メモ」を作成・配布した。
・CDEJ を中心とした多職種カンファレンス：CDEJ を中心に、治療の難渋症例について多職種カンファレンスを定期開催し、支援方法を検討した。
院内イベント：各部署から担当者を選出し職種間交流を促進するとともに、患者の糖尿病に関する関心を高めるきっかけ作りを行った。
【結果】
勉強会や一口メモによりスタッフの知識が向上し、診療方針への認識を組織全体で共有する基盤が形成された。症例検討会では患者の抱える問題について多職種で情報共有し、支援方針や治療目標を明確化できた。院内イベントでは職種間の相談・交流関係が構築されるとともに、患者の糖尿病への関心・理解を高める機会となった。
【結語】
質の高い糖尿病医療の提供には、専門知識の向上に加え、組織として方針や認識を共有し、多職種が同じ方向を向いて連携する体制づくりが重要である。本取り組みにより、知識向上、認識の共有、連携強化、患者への啓蒙という成果が得られた。今後は患者の理解・満足度への影響を評価し、より効果的な院内教育・多職種連携につなげていく必要がある。

②-5 愛知県糖尿病薬物療法研究会の歩みと成果

[1]愛知県糖尿病薬物療法研究会、[2]一宮西病院、[3]日赤愛知医療センター名古屋第一病院、[4]藤田医科大学病院、[5]西尾市民病院、[6]名古屋市立大学病院、[7]知多厚生病院、[8]大熊病院、[9]春日井市民病院、[10]藤田医科大学　岡崎医療センター、[11]中部労災病院、[12]日赤愛知医療センター名古屋第二赤十字病院、[13]中北薬品、[14]金城学院大学薬学部・キュアファーマ、[15]野村薬局
齋藤　香英[1, 2]、後藤　健志[2]、石川　惣一[1, 3]、桒原　宏貴[1, 4]、小林恵実里[1, 5]、榊原　諒子[1, 6]、笹尾　武史[1, 5]、高松　真衣[1, 7]、津川　透[1, 4]、鶴田　圭徳[1, 8]、戸田　貴洋[1, 4]、中村　敏史[1, 9]、服部　翔太[1, 10]、服部　芳明[1, 9]、濵田富海也[1, 3]、前田玲於奈[1, 11]、三輪奈津貴[1, 12]、武藤達也[1, 13]、吉川　昌江[1, 14]、野村　浩夫[1, 15]

【目的】
愛知県糖尿病薬物療法研究会は、糖尿病患者教育に携わる薬剤師を中心としたコ・メディカルの業務の向上を図り、医薬品適正使用など医療の貢献に関する諸問題を広く研究することを目的として設立された。設立から 26 年を経て研究会は第 64 回を迎える。本発表では、その歩みと成果を報告する。
【方法】
第 1 回から第 64 回までの研究会を対象に、①特別講演のテーマを内容別に分類、②特別講演のテーマの傾向を解析し、内容の偏りを検討、③各回における学会認定単位の取得回数を集計した。また、本研究会の意義や方向性を検討するため④愛知 CDEL の職種別合格者数の推移を調査した。
【結果】
特別講演のテーマは、薬剤師主体の研究会であることを反映し薬物療法に関するものが多かった。また、特別講演は主に医師へ依頼していることから、糖尿病合併症は幅広く扱われていた。一方、運動療法、食事療法、チーム医療等のテーマは少なかった。研究会の多くで各種学会認定単位を取得でき、資格取得・更新を継続的に支援していた。愛知 CDEL 合格者数は増加傾向を示し、職種別合格者数は薬剤師が看護師に次いで多かった。また、薬剤師の中でも薬局薬剤師が合格者の多くを占めていた。
【結論】
当研究会は、薬物療法や糖尿病合併症を中心に幅広いテーマを扱い、各種認定資格の取得・更新に必要な学習機会を継続的に提供してきた。一方、運動療法、食事療法、チーム医療等のテーマは少なく、今後は多職種の専門性を活かした講演を取り入れることが重要と考える。また、愛知 CDEL では薬剤師の中でも特に薬局薬剤師の合格者が多かった。CDEJ 取得が困難であった薬局薬剤師において、愛知 CDEL が新たな資格取得の選択肢となったことが、その背景の一つである可能性が考えられた。今後も薬局薬剤師を含む多職種の参加を促進し、糖尿病領域の継続教育および認定資格の取得・更新支援に貢献していきたい。

②-6 岡崎市幸田町における医科歯科連携の歩みそして多職種連携への展開

[1]岡崎歯科医師会　市川　博文[1]、[2]岡崎市民病院内分泌・糖尿病内科　滝 啓吾[2]、[3]岡崎市民病院看護局、吉田 照美[3]、三浦 恵子[3]、[4]岡崎市医師会　小出 信澄[4]、金子 佳史[4]、[5]岡崎薬剤師会　田中 理加[5]、[6]岡崎栄養士会　浅田 英嗣[6]、[7]愛知県歯科衛生士会岡崎支部　畔柳 恵子[7]、[8]幸田町健康福祉部[8]

【目的】
糖尿病は全身疾患であり、歯周病をはじめとする口腔疾患との関連も明らかになっている。糖尿病のある患者の健康寿命延伸と重症化予防には、医科・歯科・薬科・栄養等がそれぞれの専門性を生かし、一次予防（生活習慣改善・発生予防）二次予防（早期発見）三次予防（重症化予防・QOL 維持向上）に至るまで、地域で連携することが重要である。岡崎市では、三師会を中心に多職種連携を進めてきた。本発表では、岡崎における医科歯科連携の歩みを振り返り、今後の地域連携の方向性を考察する。
【方法】
岡崎市医師会、岡崎歯科医師会、岡崎薬剤師会を中心とした三師会活動に加え、岡崎市民病院、岡崎栄養士会、愛知県歯科衛生士会岡崎支部等との連携活動を振り返った。糖尿病と歯周病の関連に関する啓発、医療関係者間の情報共有、地域住民への健康教育等を通じて、口腔管理を糖尿病診療の一環として位置づける取り組みを整理した。
【結果】
活動を通じ、糖尿病と口腔健康の関連について医療関係者や地域住民の理解が広がり、医科から歯科、歯科から医科への紹介・情報共有など、相互連携の重要性が共有されつつある。また、薬剤、栄養、口腔衛生など多職種の視点を加えることで、患者を中心とした包括的な支援の必要性が明確となった。一方、個々の医療者の努力に依存せず、地域全体で継続可能な連携体制を構築することが課題である。
【結語】
糖尿病対策において、口腔を「治療する場」にとどめず「全身の健康を支える場」として捉えることが重要である。今後は三師会を核として多職種連携をさらに発展させ、一次予防から三次予防まで切れ目のない、医科・歯科・薬科・栄養・歯科衛生が共通の目標を持ち、口腔・栄養・運動を含めた包括的な健康支援を地域で実践したい。岡崎市・幸田町から、地域住民の健康寿命延伸につながる新たな連携モデルの構築を目指す。